

発見！白井の仕事人 67

通信・電力をつなぐインフラ社会に貢献

堅川線材株

工業団地の中に昼夜問わず工場に明かりが灯る。これが24時間操業の堅川線材株だ。



工場内の様子

大手通信会社や電力会社で使用される電柱や鉄塔につながる電線、ケーブルなどの一部となる製品を製造し、わたしたちの暮らしを縁の下で支えています。沿革などを第9代社長の堤信昭さんに聞きました。

同社は、昭和21（1946）年にくぎ、針金などを製造する房総線材製品製造所を尾籠栄二氏が個人経営として創業しました。その後、昭和24（1949）年に江東区深川毛利町に移転した際、付近に堅川という川があり、この川にちなんで（株）堅川線材製品製造所という事業所名に改めました。そして、昭和35（1960）年には社会インフラ需要などの事業の拡大に伴い、市川市島尻に移転し、その後更に増資、事業を拡大して、平成16（2004）年、市内の工業団地に移転しました。

主な製品は「亜鉛めっき鋼より線」「亜鉛アルミ合金めっき鋼より線」「亜鉛めっき鋼線」「亜鉛アルミ合金めっき鋼線」で、電柱や鉄塔をつなぐ電線やケーブルが使われています。電線やケーブルの内部はこれらの

鋼線を軸にして電気を通すためのアルミ・銅線が取り囲むように構成されています。これは柔らかいアルミ・銅線を強度のある鋼線が支えるための形状であり、また、何十年にもわたって電線として屋外の電柱に架線されることから、腐食環境に耐える必要があります。腐食に耐えるために亜鉛で「めっき」を行っています。亜鉛の性質上、24時間体制で操業をしなければならず、「強度を持って黒子役となつて社会を支える」という信念による努力と高めた技術力によって、製品は造られています。

その他には、広島県のカキの養殖や長野県のブドウ園の棚などにも同社のワイヤー製品が使われているとのこと。

堤社長は「工場は生き物のようだ」と話します。これは白井工業団地に移転した際、製品の耐食性を保つための「めっき」ができず、苦労した経験が基となっており、原因はわずかな製造条件の違いと分かった時にはものづくりの難しさを改めて認識したと話します。

今後の展開、新しいチャレンジとして環境変化などにより、自然災害が多いことから、土砂崩れ、河川氾濫などに対応するため、強度のある防災ネットなどをターゲットに技術力を上げていきたいと語ります。

今後の堅川線材株の取り組みに注目です。

産業振興課商工振興班 内線3241